

酒めん肴 16

2000 年前のメロン

私が勤務する総合地球環境学研究所の田中克典さんが、滋賀県守山市の下野郷遺跡から出土した正体不明の遺物から DNA を取ることに成功した。弥生時代中期（2100 年程前）のものだ。直径 10 センチほどの、少しへしゃげた形をしたそのものは表面が濃い茶色をしており、たまたま現場に居合わせた私はひょうたんか何かか何かと思ったのだった。ところが DNA 分析の結果はなんとメロンだった。びっくり仰天した発掘担当者、川畑和弘さんが記者会見をすると言い出して、2000 年前のメロンはマスコミに大々的に取り上げられる羽目になった。メロンといったものだから、多くの人がネットメロンのような甘い果実を連想した。新聞の中にも「弥生人がデザートにメロン」みたいな書き方をするとところもあって、話はまた広がった。

メロンとひとくちに言うものの、アジアには、マクワウリや奈良漬けにする白ウリなど、いろいろな仲間がある。マクワはともかく、白ウリなどお世辞にも甘いとはいえない。ネットメロンなどの「洋物」ばかりをみていると、メロン=甘い果物というイメージがあるが、それはごく最近のメロンについてのこと。出土したメロンがどんなメロンなのかが気になるところだが、残念ながらそれはまだ分かってはいない。

そもそも弥生人たちはメロンをどういうものと認識していたのか。甘いものであったならば「デザート」だったといってもよいかもしれないが、そうでなければ何だったのか。奈良漬のような漬物があったのだろうか。中央アジアなどの乾燥地域では、メロンは水分の補給源として使われる。また漢方の教えにしたがえばメロンは体を冷やす働きがあるとされる。医薬同源の思想では甘いメロンもまた、苦い薬だったのかもしれない。などなど、いろいろな可能性が指摘できるが、今のところ、これといった仮説はなさそうである。

薬といえば、同じ 2000 年ほど前の中国湖南省の馬王堆遺跡から出土した中年女性のみいらの胃からは、何百という数のウリの種子が見つかって話題になったことがある。彼女は胆石を患っていたこともわかっており、熱っぽい体を冷やすのにメロンを食べたのかもしれないと私は思っている。しかし胃から種子が出たということは、昔の人はメロンを種子ごと食べていたということの意味している。そういえばメロンは、種子の周りのあのどろどろした部分が一番甘い。昔の人は、そうしたこともよく知っていたのであろう。